

繪本拾遺信長記

前篇

二

特別
~13
2507
2



門 遠
號 2507
卷 23-2

繪本拾遺信長記初篇卷之二

目録

撰州石山御堂草創之事

同圖

依く本定教山科の御堂を攻

下間教義上人と大坂一伴の事

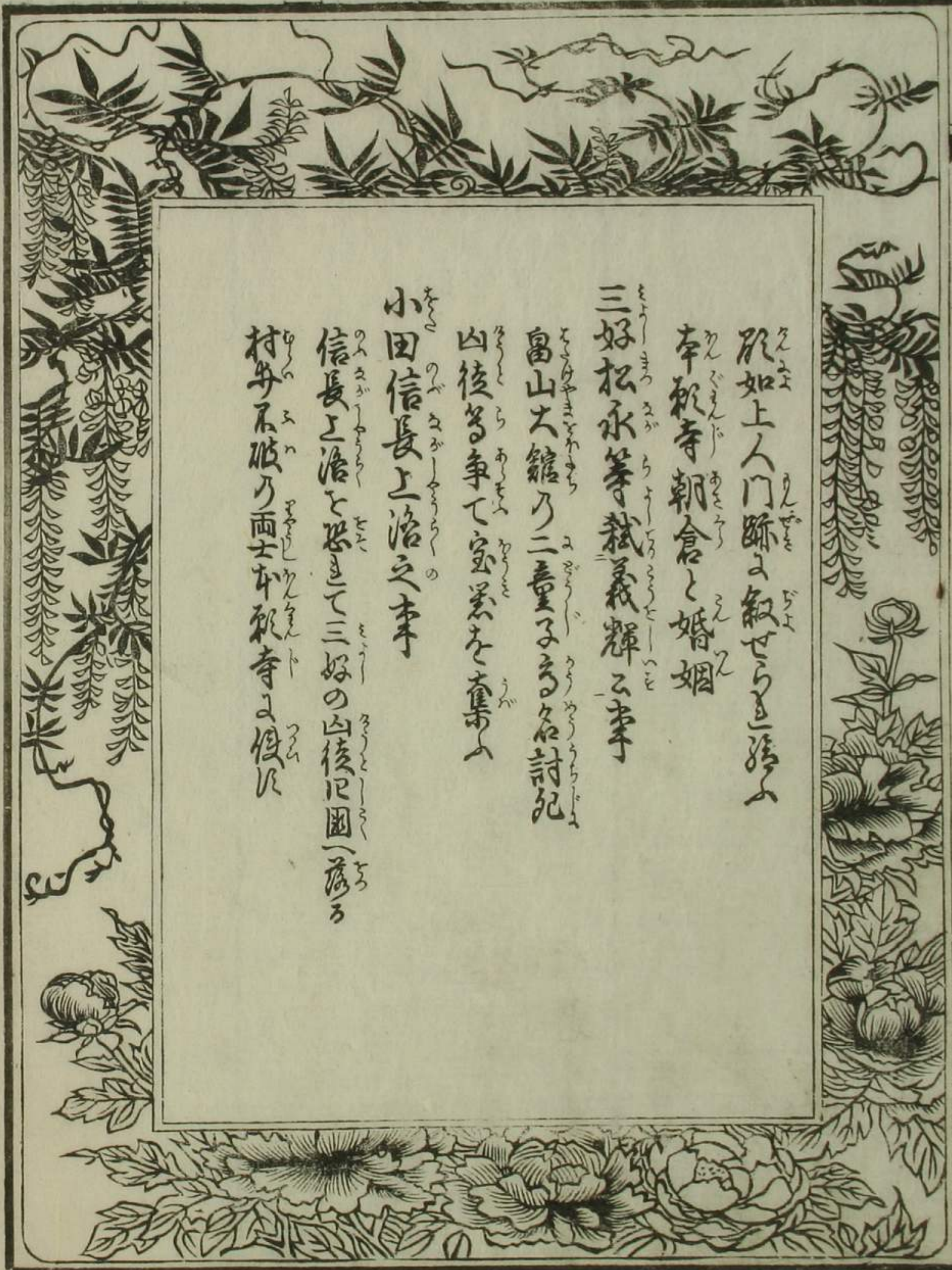
中田の御書拜徳

顯如上人奉願寺相兼之事

院如上人御即位の料調進

繪本拾遺

目録



如上人門跡を叙せらるる如上人
本願寺朝倉と婚姻

三好松永等裁義輝之事

畠山大館乃二童子名討記

凶徒多事て宝器を奪入

小田信長上洛之事

信長上洛と思きて三好の凶徒に圍はる

村母不破乃西士本願寺に侵は

繪本拾遺信長記初篇卷之二

横州石山御堂軍創之事

蓮如上人の若狭より丹波迄征伐して津國富田の庄を志す

此の如上人の文明九年山城國山科郷に本寺を建立す

不に越せ給ひ森道西ると力と合せ九年を經て文明十七年御造

營令々調ひ定む候に於て十二年是と山科の御寺と稱し

延徳元年本寺を御八男実如上上人譲り給ひて明應元年御寺

八十二歳に及泉州堰へ御下向あり其時津國に天王寺と稱す

給ひ生玉の庄内石山と云ふと見巡り給ひて何國より御面

儀方り天皇皇忽然と御出上人と向ひてや多りの我け不に貴

傳と待り既又次し地教法の靈場方り定む一宇乃





蓮如上人
石山
御書
至
録

日本書紀卷二

坊舎と營と要路の道信と化蓋（他力念佛と弘通と）是則
 上宮太子の勅令ありと云候て紫雲（系）西天（飛）より
 上人奇美のちひをばし遂にけ地を抄ひく一字と建良し終る是
 を石山乃御堂と稱ひ其後明應八年己未三月廿又日山科の
 御坊を抄ひく御遷化ありせ終る御年八十又歳之第九代
 多刻實如上人奉教寺相承し終る御年十代澄如上人御年
 僅に十歳とて實如上人遷化し終る御年之皆家老下間孫若
 守が抄ひく御年下間が威勢日く又強くこと思ひ我志を
 壽加賀國（下向）知り石の坊を門徒を聚集り近國近左を亂
 妨し地政を殺し郡を退歩切る地移しく小國の強勁去方
 あり御年又天文元年澄如上人御年十七歳ありせ終る御年

石巻の合戦出来く山科の御年定よに及びぬ其由来と見ゆ
 よに州觀音寺の地を依り本六角彈正定頼とつる者あり
 本教寺の家老下間法橋頼家其外御年中守頼重等が我
 志の働き多きより記す本教寺と六角定頼たぐひは眼と
 結ぶるありしが元来定頼は五二の日蓮宗とておられ念
 佛宗門の本教寺惣宗せらぬ如く日蓮宗の僧徒教多
 かりし其勢三より斗不志に致てし科の御年（押）せ八方
 より左圍と火と致て寺中へ乱入し本教寺の僧徒大に
 驚き防ぎ支んとしれども多勢の衆より御年風をけしく重
 宝とてくを燦とれが候てふる御年進好るごま衆人御年
 せびひ定とて爛とて或い款と斬例しれ嘆き叫ぶとまり目あり



依、本定頼
山静の町を
をまゐる

らまぬ次才之安又後如と人の近習下回と被法橋取まとの
 若あり頼秀頼登が取らるふいぬに智勇並後世し若かりが
 け律と刀々々急ぎと人の御前あり今いともや御事も火押
 まへへくつくりし知れ小ちやく大坂(御退去ありてまうる所)
 款乃大勢に面と丸圍しゆども某御所開き仕込しとわらひく
 發工人と馬よりた乗せ乗らせ元祖登人の善款と脊よわら
 付大羅刀と馬もに引さげ弓もにまよと人の御馬の口ととり裏
 門より出んとしれおまの太軍雲霞のどくは目倍の大旗
 教十流と入替く為人を逃ると呼らるる蟻のむくも集り
 来ら瓜下回れ菱切つと一勢喚くとわらしが近寄款又六騎目
 よもせに羅為せば誰り命と惜まらるる勇とまじりおまの

大軍丸衣と門と退りたる頼菱得たりとと人の御馬ととら
 群る款の中へ一文字に切へる瓜取りく為りたるとのがはじ
 しのと款兵ども付幕ひく深草の里を退来るとわらひ
 せく斬りしひ引りして「羅剛」の命と捨て防ぎたるはる
 たる我ひ之仇と本の一黨日蓮宗の法師系何圍もせし退りけ
 て親徳宗の根と絶せやと我懐の古とおろしと勢一まう
 退りたりけりあく備方又守へたるやと人の御難と敵い
 とく信心の門後多百姓剛人老少男女のきらひわく或は竹
 を潮敵をひくよ引さげく安よ二十人又被不より三十人
 集りく退来り款を支つと人を守護しなり三橋の辺
 ままはるるふ大坂野田後羽の門後六百余人けしとせ

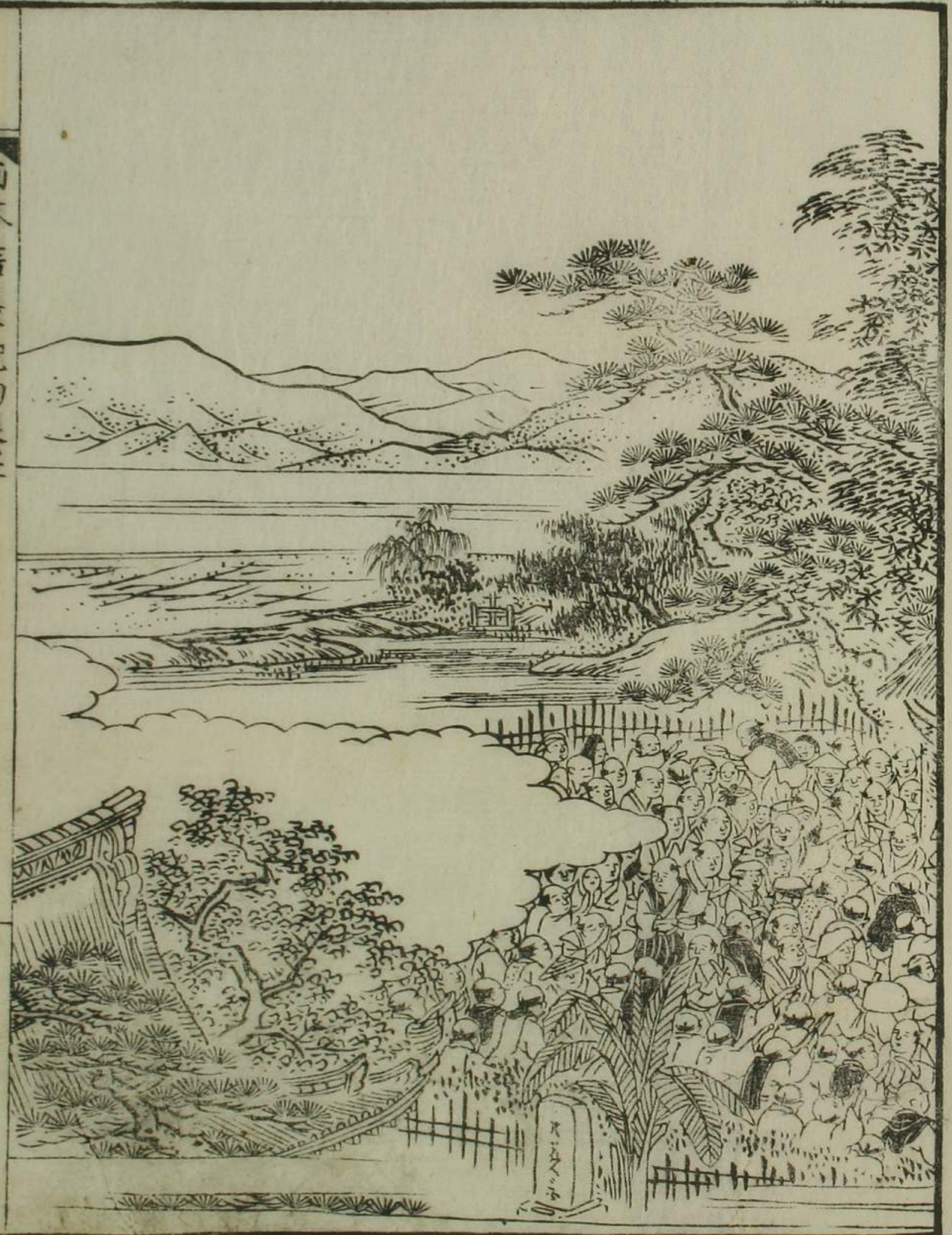


下回乾菜
工人と
大坂へ
修む
なる

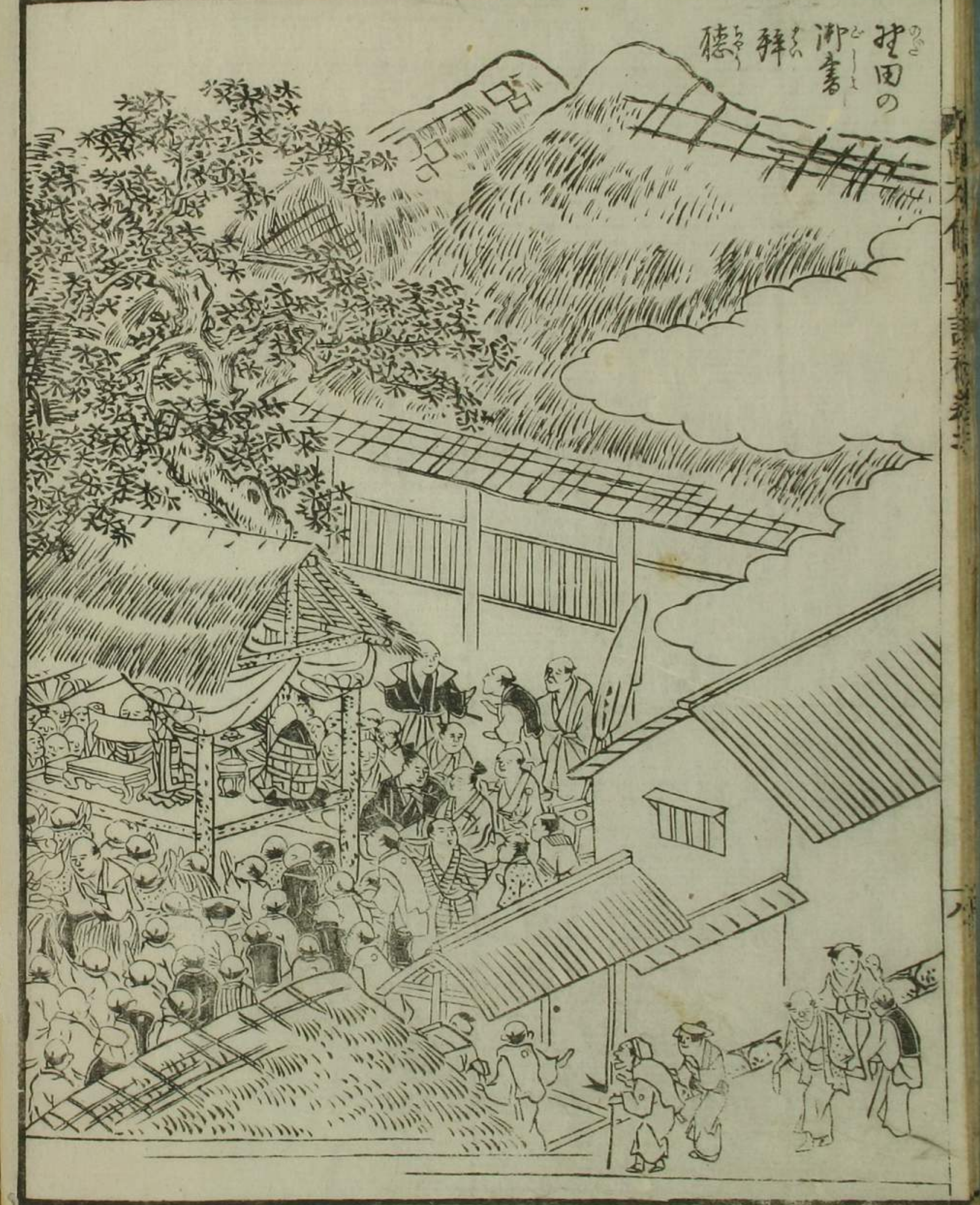
河内の為系着し 船りて上人と押回の御事へ入系せ款の多
 勢を引け一日一夜火ありしと戦ひる門後の勢ひ強く
 して終に六角勢切りて度治れぬと佐右方の傍まを
 引つりて河内の門後一余人佛款とのりて後にも
 引包こえんぐと切れん討ちり若敷と知りて彈正定頼の奉り
 志く本津川の方へ引引しと又りや岩田上津屋の門後勢配
 落武者と討ちえと村雲のどく集り来てば彈正定頼自ら
 ち力振そむり来まり款と七八人切りせ勇と振りて戦ひたるとき
 のみよりの戦ひは身津版を續く味方も何れがいて遂にけり
 去良のみ討ちたりされば佐右方の一黨日蓮宗の傍後等お
 りしと一途失て押回福勝小款一人も何れがいて人解りて

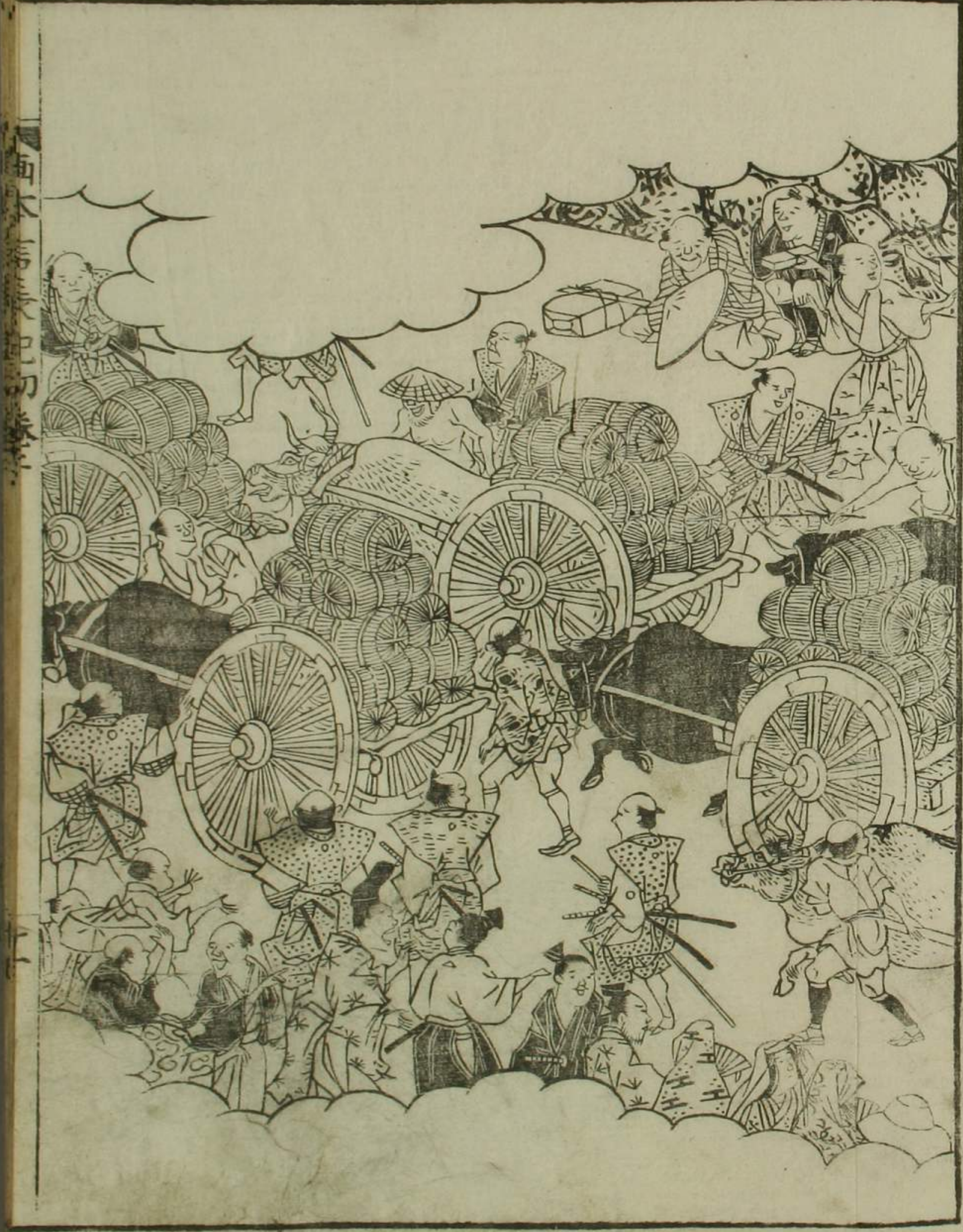
勢ひ強く是令く門後の傍後等令と備まり款とはあととく
 それくは獲取の御河を揚ひたるときとて小津宗右の御事
 には令とともろぬ門下の傍後男女大地いはしあり勿ろ
 神々の今の御河や我らにいた悪業深き九まの令又み七
 む捨ればとて報ぐ盡されぬ御河の大意大悲法款退教御
 宗右繁昌承く念佛世は弘らい其切徳とて出はしき乃の
 後にの御事もたのとあり活如来の上人様へ御恩報の令我
 ぞやとて款の勢とるとると一番と討配して極樂へ成佛せよ
 小雅や布やと教百の門後一日は夢を揚て啼りると勝之
 くる次等ありけり討記也者と上人様と表とて押りし御事
 等の御事と下とると其御書と回り

日本書紀中の卷之十一



徳の御書
神田の



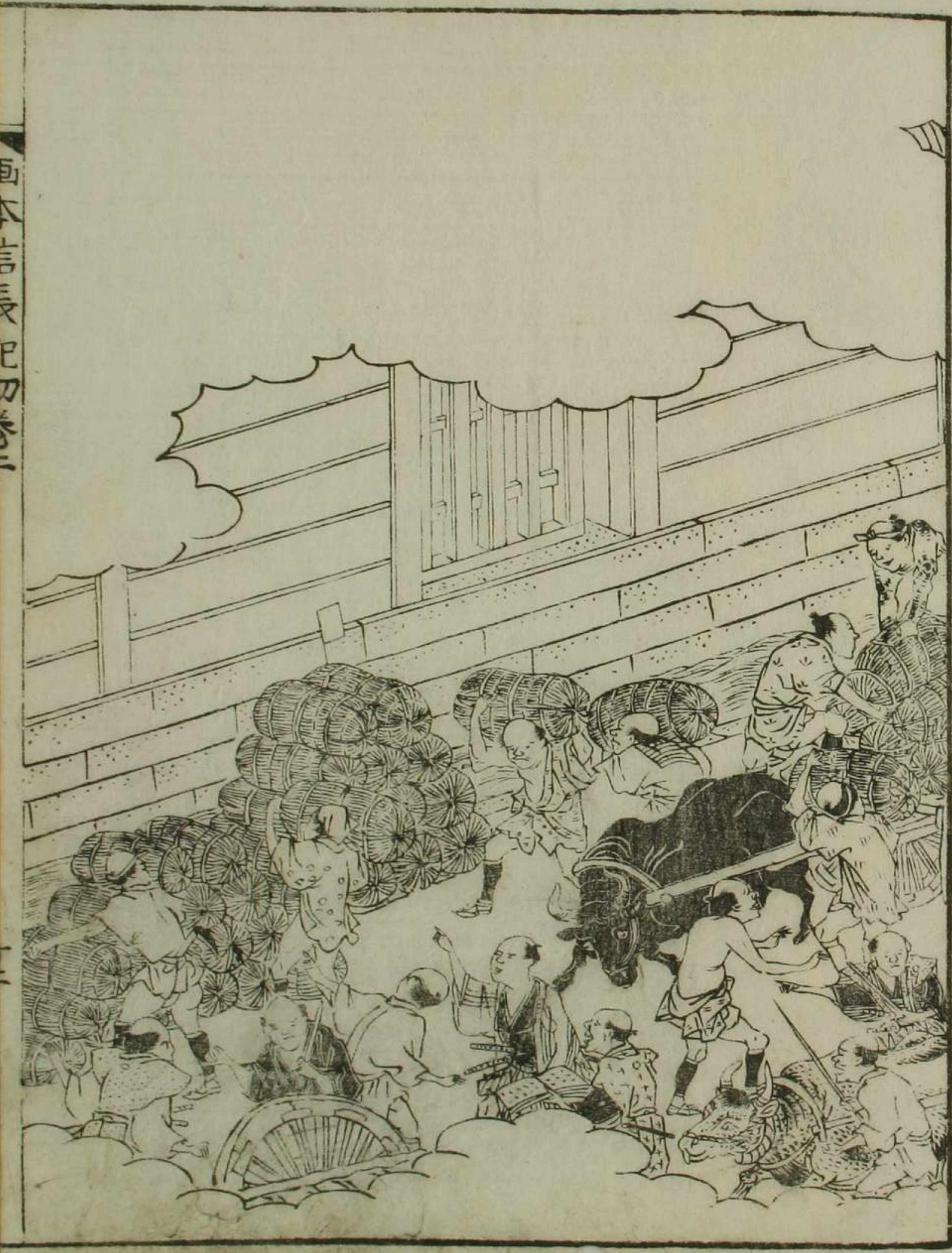


西本陣馬場



徳知上人
御即位の
料調進

西本陣馬場





其三

厚木作長言

十二



其四

日本信長記初卷三

料と持献し大札と執勢ふるた旨奏すむたれば帝浪りて
 叡感ありてましく式札執勢ふるたしと勅定りて天文二年正月
 廿二日中教寺より弟の料とも調進ありて御即位の式滞り
 たり給道しうば上人(勅書を賜ひ法印の大僧正に任じ給
 ふされい上人の大徳海内よき親鸞聖人の宗承まされく
 廣く諸國の門系恭敬仰仰せられたる者也)其後天文
 二十三年澄如上人御年二十二歳とて入寂し給ふ弟十一代の
 法継を顯如上人と申す則澄如上人乃嫡男御簾中の細川
 右京左近将元の息女後又如春尼とて号し給ふ弟加賀國の
 坊主門後の實二万余人寄集りて其國郡を切立て中教
 寺の領地とも給ふ給)城中の國を富山修理寺といひ一黨

又本國と美破らまに而余吾とて不(出家)依く本定領を
 料とて御節と見合せられたる今加賀能登城中の三ヶ國一處は
 中教寺の領地とありましく令銀米穀と大坂(運送)する給ふ
 中教寺の勢い日々強く肩と並る武家もは(勝)勝濟とて
 門後等誠意とて切立んとて國を朝倉教系入る宗橋とい
 へば我より既よ又年小國の勢甚しく弘治二年京師の
 軍義輝より御教書りて兩國と扱ひ給ひ給ひ合致し止
 りたり給ふ人皇百七代正親町院の御宇永禄二年中教寺
 顯如上人をじやく門流に任せらる給ふ上人十七歳なり是ぞ
 當寺の面目とて東く(門下)を賑ひいさまぬ者もは(日)日又年の
 秋又しや加州の門後等朝倉が(知)知れそむき再び合致始まり



京都の通洛所塞ぎたるに米穀の運送なりがごとく一方其の困窮は先も依てお軍義輝云け度い大銀虎馬門佐武田治部少輔あ人と上候として御教書と帯し小圃より朝倉宗秋寺の圖表を志門の且和睦お遠所より信長朝倉義系が女と以て殿如と人の婿男茶久丸教如と人の切名なりの妻合はせたる旨告回せしに双方とも之に應じ謹で婚約を成し終に西國の合戦終り朝倉と宗秋寺唐園の因と信長相よ又急難と助け越ふと約すしと約すしと二乃中とは如にたり後年又も尾州の大守小圃輝正忠信長と石山本願寺殿如と人確執を押しし十余年の合戦はけしより終せり元来小圃朝倉の両家は一方の武臣武衛義廉の家老なりしが去る應仁の比山石細川

乱を成せし時朝倉家の治部吉美義敏よんはありせし君義廉と教きて云方家の味方より終に朝倉の守護職を奪ひ云方より朝倉宗秋の國より推し朝倉輝正忠敏系と名系諸侯の内よりつらつら小圃家の代り義廉の子孫を君と仰ぎ尾州法別の際より立居其方の執權として尾州の乱と断る所は信長の附よりつらつら其形をとりたり先よりつらつら小圃家より朝倉と尾長の家と仰り朝倉家より小圃家を尾長と海り文明永福よりつらつら両家確執止りつらつら抑る小圃年信長軍勢を率て信長と義系と美方の急なり後反朝倉の朝倉義系に助力と乞朝倉則ち後反一味して軍勢を押ししと小圃と合戦及びふこととびくは先も依て小圃朝倉いよく懇款とめくお守に責む



本願寺
朝倉と
婚姻

日本書紀

とん少略の外地すはしまるる小今度中親寺朝倉家と結び其
中睦はじき小付くも小園の門後多何とく朝倉家力と添
小田方と要と両家合戦をえ合へ討つ門も門後の一様多横槍と
へ小田方の妨げをぬせし後小元素志治はすた信長心中より
甚乞と勝り朝倉と比して後中親寺と歩渡被宗門と破滅せ
せしゆ今の勝りをとらさんものといまご切参の其時より心内よ
積しゆと一朝一夕のすまはらうに

三好松永多義輝云事

け初足利十三代のお軍義輝云室町の御所にて押はしつらうがその
老長三好日向守松永輝云お彌岩藏を従女多永福
八年八月十五日法あ指と被破して多勢の人殺を奪ふ室町の

御構は押よせに方より五圍と鉄炮を打ちけむ二五三よまを
つら御所中よりは勅番の武士曾代の侍らひ役けぬらうんが
素肌をうれ得物追え喚き叫ぶ防ぎ戦ふとくとも凶徒の
甲冑は身とわら飛らるをみておまじし御所方の武士おひ
くよ討死を其の中より畠山九郎十郎藏大鍬若る代九十九
歳素志池の波と結びとげ白柄の羅力あ車よ也しるま
又向ふ天罰をうけに於て殺ひをとりい知れと大馬小言つて
兩人等しく群りたる歌の中へ喚くわけの歌七八誘ふ
ぎ例し乱軍の中より討死するの多しと結ぬ梅の花乃
歳よりろく教ふ似たりお軍義輝云も今いこふよと
必しつるばいで多敵の軍して城後多が目と覚させんと



富士大鍛の
二重子
討死

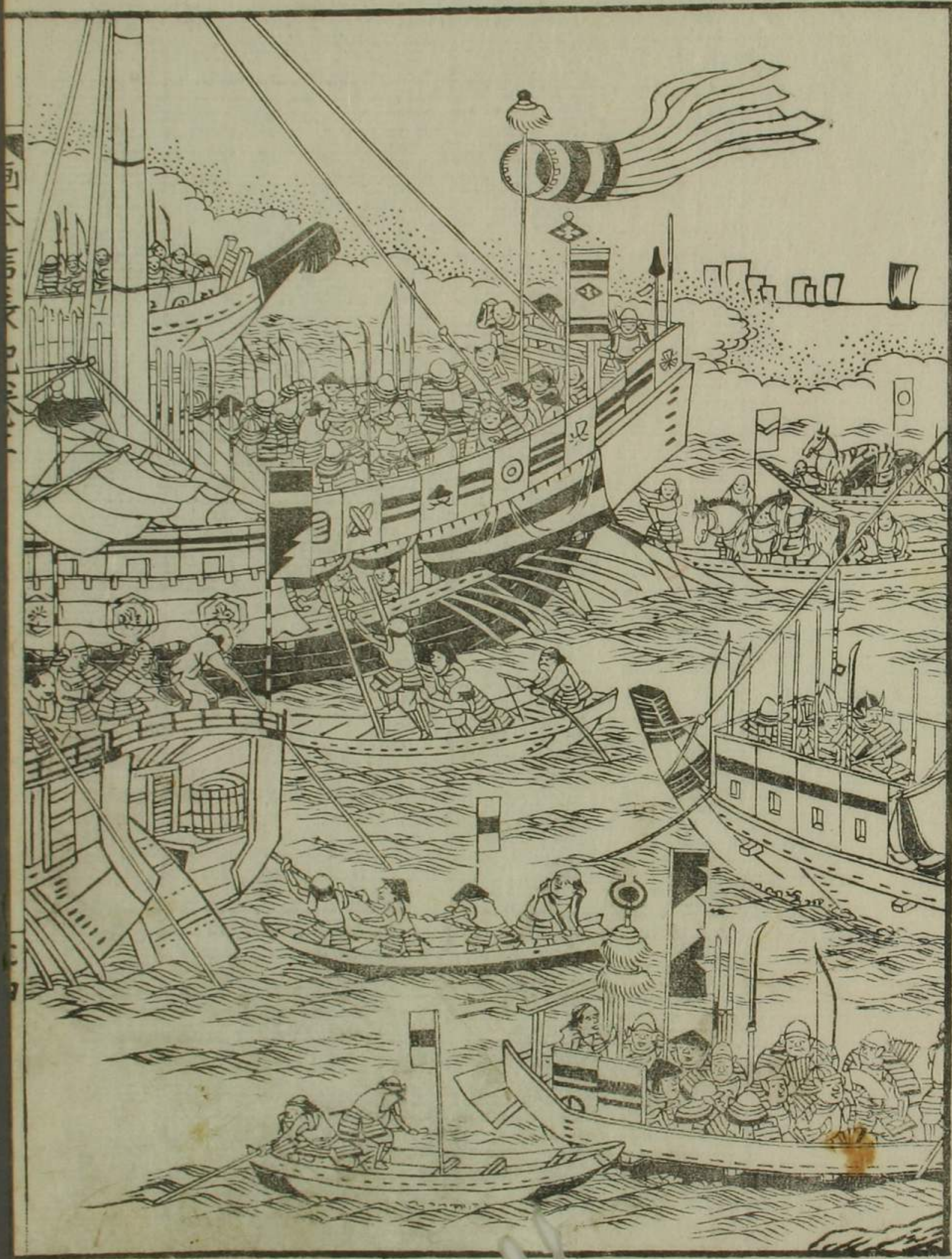
出家代々持物有りる名器を宝令銀珠玉をまじり進士
 伯てより来る款の中へ馬標のどく投させ給ふ又款又馬
 悪出意むらち刀羅刀も打捨て給ふに押り寄る我軍
 んといひめたぐるお軍これと御後じく御分はしとあ合ふ
 進士十八人左右も引合し嘯と喚ひて切て出候もに羅を十
 文字も切まいし虎丸の械堂百人討殺し人もの掛ら
 と殿中へわけ入給ひ火と敵けて焼とさせ至後跡は後掃
 切て失給ふ三好松原が安心のまふお軍と戦しなり程
 御連枝の秀と失ひあはせんと義輝公の御令身周高と市
 御方藤苑院も押しつら瓜謀りて討まり今一人の身若
 と南都一系院の御門も危きと申せしかけ次第はしめし

密に南都と遊ばせ給ひは及も到り和田修智守をたの
 お軍の執と頼んと計給ふ又同國親善寺の燃る佐之本六角
 虎系も美義談り覚意の御味方とあり佐と汁ををばけ
 とし其物又接園妙義復却て三好が安よ一隊し覚意と
 かいちとんと及是又依てけをり遊ばせ給ひ候もに
 き朝倉虎房門尉義系と頼と安よと送信し給ひ新お軍を
 昭云と申する義昭云けをり三年止り押しつられとも義系某
 弱の悪物と申す事と申さば是と押しつら義昭云小田伝長を
 頼と給ふは財信長と及信の秘友と伝し彼卓の機も居たり
 くらげけりやをゆき大木小木給ひ急ぎ新お軍と遊ばしなり
 石向も義兵を揚て三好一家の逆賊を誅伐仕るはしと傳て



日本外史卷一

七



小田信長
 上流忍
 云々の出
 後四
 あり

画本
 徳川家
 徳川家
 徳川家

勢ハ利刃の竹と破グぞくいとんで都へうつとつらき後二三好
 松永が輩よりよくしり殿田の邊に軍勢を備へ信長上洛せば
 一まきへんとあつじり其の碓りよ及びつらき信長の軍威鬼神
 のごとく速に登りさへ向と空に怒るき系と引退搦刀は面回の
 より居しが實にもたまうえは阿波乃津所義榮とといさうひ
 に國とじて落のびより信長向をさる敵なくとて京都へ着せしむ
 義昭とむ久あうせ三好の寄政を改め又畿内と征伐し成功は
 朝輝のどく諸國の大名上洛とせし隙休せる者教を知らずは
 信長日比の志居大守達し臨懐の心いよく強くは附節と失ハ
 比搦州石山本教寺と美崩し頭如子と首と人んと脱し軍勢
 をとせし向んとせしとつらき各名の軍しと本教寺と美懐しは

世人の議論もむりしとく先村丹波郡不破河内守あ人をめて
 本教寺へやせしつら其口と乃強き信長今度新軍義昭と
 を身獲し送款三好が一黨と誅伐の爲義兵とあけて上洛せる一和
 送後多我軍威又恐とをくは國の地へ退散し京都暫く靜澄な
 又知つらとつら凶徒多いまし洗に依せは被送後多軍兵と集
 め悪黨をかたらひ再び上國して新軍と稱せし都と聞さんこと
 必定なり信長つらとつらよける石の地と武と周ゆり又寇寇の
 要害ありけはは堅固の一城と築きは國の三好一黨をえしめ中國
 九州の朝敵をせし人京都と平安ありしつら天子の宸襟と休め
 將軍の急と押さやうは信長名命と令しつら地方の送款とつら
 下野の途炭と般ひ天下泰平乃斗膽をみんと然は是保つら

日本信長記卷二

九四



村井不破の
 両士
 本親寺
 俊次

日本信長記 卷三

